

歴史民俗資料館特別展

古絵図に何が かかれています？

―絵図にみる池田市域― 第1回

今秋、歴史民俗資料館では、古絵図をテーマとする特別展を開催します。特に江戸時代の池田市域のものに焦点をあて、今回から4回にわたって展示の概要を紹介します。

慶長十年撰津国絵図

「古絵図」とは、明治時代以前に作製された地図のことを指します。単に絵図と呼ぶこともあり。絵図は、何かの目的があつて作製され、田畑や山川、道や家屋など、その目的に応じて必要なものが描かれました。凡例などの文字情報が記されることもあります。今回は「国絵図」に描かれた池田市域の様子をみていきます。江戸時代、日本国内には68の「国」がありました。池田市域を含む大阪府北西部から兵庫県南東部にかけては、「摂津国」にあたります。

慶長8年(1603)、幕府を開いた徳川家康は、翌年全国の大名に対し国絵図と郷帳(土地台帳)を提出するよう

命じました。これらには領主の違いに関係なく、国・郡ごとに村や村高を記させた、という特徴があります。国力把握など、幕府が全国支配を推し進めるために必要な事業でした。

今回展示する「慶長十年撰津国絵図」は、このとき幕府に提出された絵図の控とみられるものです。大きさは縦225cm、横249cmあり、縮尺は2万5920分の1程度といわれています。余白部分に、郡ごとに集計された石高、耕地面積や村数、およびそれぞれの総計などが記されています。

また、伏屋飛騨守、水原石見守の名前、慶長10年(1605)9月の日付の下に当時の国奉行・片桐且元が改めた旨が記されています。伏屋、水原は豊臣秀頼に仕える大坂衆です。彼らが大坂城のある摂津国の基本図づくりにかかわったのは、幕府が始まって間もない時期の、この地の状況を表しているといえます。

国絵図にみえる池田市域

さて、この国絵図をみていくと、国や郡の境界が引かれ、山や川、街道、名所が描かれています。小判形と角形には当時の村名と町名がそれぞれ記されていて、郡ごとの色で塗りつぶされています。たとえば、池田市域のある豊島郡

は朱、隣接する川辺郡は白などです。

現在の池田市域周辺をみると、「中川原村」「西畑村」「西市場村」など複数が小判形で記されており、江戸時代初期の池田市域の村むらの名前、数などが確認できます(左写真)。隣り合う複数の小判形に同じ村名が記されている(ソーンハチ村)、のちに確認できない村名が記されている(堤内村など)、何も記されていない小判形が2つある、などが分かります。複数の小判形を細い朱線で結んだところもあり、相互に関係が深い村同士であることを示すと考えられます。

また、「池田町」と記された角形があります。この地は戦国時代、池田城を中心に町場が発達し、江戸時代にか

て周辺経済の中心である在郷町として発展しました。この記載から池田は慶長10年の時点ですでに「町」と認識されていたことが分かります。ちなみに豊島郡で角形の表記があるのは、池田町だけです。なお、池田町の角形は右半分が豊島郡の赤、左半分が水色の2色に塗り分けられています。何を示すのか明らかになっていません。

簡単ですが、「慶長十年撰津国絵図」からみた江戸時代初期の池田市域についてご紹介しました。

次回からは各村を描いた村絵図についてふれます。

◆問い合わせは歴史民俗資料館
☎751・3019



▲「慶長十年撰津国絵図」のうち池田市域部分
(西宮市立郷土資料館蔵、兵庫県および西宮市指定文化財。画像はにしのみやデジタルアーカイブより)